

鳥海山有情

日本山岳会 No.7734 木村喜代志

庄内平野から見る鳥海山は、日本海からすきっと天に向かって聳えている。その秀麗な山容から、「出羽富士」の名で呼ばれている孤高の火山である。

有史以来噴火を繰り返してきた山だけに、裾野の民にとっては常に畏怖の的であった。古くから山そのものが、火を吹く荒ぶる神、大物忌の神として崇められてきた。その一方で、米どころ庄内、由利の美田が山から流れ出る雪解け水に頼ってきたところから、母なる山として農民の生活に溶け込んできた。山頂には、奈良時代より出羽の国一ノ宮である大物忌神が祀られ、平安時代以来修験道場として繁栄を極めてきた信仰の山でもある。

近代登山の幕開けの大正末期における積雪期の登頂は、「聖山を櫓で汚したもの」として大いに非難を浴びたという。白装束でなければ登ることのできない山であった。広い裾野を荒波が洗う独立峰だけに、東北の山特有の重厚なボリューム感に欠ける。しかし、一旦山懐に入ると新旧入り混じった複雑な火山地形と、厳しい季節風とそれによってもたらされる膨大な雪とあいまって変化に富んだ植生など、味わい深い景観がいたるところに展開されている。鳥海山は、秀麗な山容の高山というだけでなく、人間との長いかわりとともに、変化に富んだ自然景観からも興味をそそられる山である。

雪深かった山麓の里は、白いコブシの花が咲きだす頃になるとにわかには活気づく。綿帽子をかぶったゼンマイが明るい陽だまりに顔をだし始めるからだ。そして、ゴールデンウィークに合わせて鳥海ブルーラインが開通し、多くのスキーヤーが集ってくる。大平、鉾立をベースにして、御浜から、さらには足を伸ばして外輪山から日本海に向かって滑る。コースにとらわれることのない広大な雪原の雄大な山スキーである。そして、木立が黄緑色に染まり、黒い地肌が顔をのぞかせ始めると、スキーヤーたちは季節風の風下側にあたる滝ノ小屋や河原宿、矢島口の祓川へと移動していく。

新山から千蛇谷、鳥越川を滑って中島台へ、千蛇谷源頭部から荒神ヶ岳北面に回り込み、雪に埋まった赤川を横断し中島台へと滑るコースは、鳥海山ならではの野生的な山スキーである。

6月に入ると、鳥海山は梅雨のはしり雨に洗われた大気のもと、一段と鮮やかさを増した緑と残雪の白に映えて一際美しさを加えてくる。梅雨とともに多種多様な高山植物がいっせいに花をつける。どのコースをたどっても眼を奪うお花畑に出会える。なかでもスキーヤーの去った滝ノ小屋上部の河原宿は、心字雪を背景にして、とけて流れ集る清流をのせる高原状のお花畑と草原となる。ニッコウキスゲの大群落をはじめ、ミヤマリンドウ、シナノキンバイ、ハクサンイチゲ、コシジロウレン、ウサギギク、シラネニンジンなど紅白黄紫の花々が、さざ波のごとく風になびく。

鳥海山には、チョウカイフスマやチョウカイアザミなど、この山特有の植物を十数種類数えることができる。これらの植物を求めて、幕府による採薬登山、明治に入ると著名な学者たちによる採集登山がみられ、中央でもおおいに注目されていたほどである。

心字雪の大雪路、小雪路といった風流な雪田を踏みしめて、薊坂を登りきると外輪山で、左手に山名の源ともいわれる西鳥海火山体の火口湖、鳥ノ海(鳥海湖)が見えてくる。外輪山を右に登ると、黒いドーム状の新山と大物忌神社の本殿を望む伏拝岳、開山役ノ行者を祀った行者岳、更には外輪山最高峰の七高山と続く。

七高山からの眺めは、眼下に広がる日本海、庄内平野、湖沼と湿原の由利(仁賀保)高原、深ぶかと原生林に覆われた出羽丘陵の山なみと変化に富む。その彼方に、岩手山、栗駒山、月山、連峰をなす蔵王、朝日、飯豊と、東北の名だたる山々の全てを視野にとらえることができる。

その一方で、マッチ箱状の巨岩「虫穴」からのびる百宅コースに眼を移すと、昔のクマの爪痕が残る巨木、ヤマヒルの巣くったというブナの原生林の皆伐ぶりが目に入る。人間が野生動物たちの安住の地を独善的に奪い去った跡である。1974年(昭49)、153年ぶりの火山活動は、人間による身勝手な行為に対する鳥海山の怒りだったのだろうか。

また、七高山から見る「影鳥海」は、この山ならではの奇観である。日の出の力強い陽光に照らされた鳥海山が、日本海上にありありとピラミット状のシルエットを映し出すもので、見るたびごとにその神々しさ胸さわぎを覚える。

外輪山は、東鳥海火山体の中心をなし、承和13年(846)の爆発で山頂付近が飛び散った名残で、大きな弧をなして北に向かって開口している。この付近一帯もミヤマキンバイ、イワギキョウ、ガンコウラン、イワベンケイなどの乾性の高山植物に飾られている。なかでも、この山を代表するチョウカイフスマは白色花卉の可憐な姿だけに一際生命力の強さを感じる。

外輪山から新山へのコースは、七高山近くから千蛇谷源頭のスノーブリッジを経るものと、行者岳から鉄梯子を下るものがある。外輪山内壁は、吹き上げてくる北風の舞台でもあり、風に耐えて岩塊の間に根を張る草花は一段と美しい。

2月、滝ノ小屋からソロバン尾根を経て、新山に立った日のことを思い出す。高曇の心落ち着かない日であった。外輪山の内壁と新山の岩肌に張りついた岩氷に見惚れたのもつかの間、北風に舞い上がる雪に視界を奪われ、襲いかかる雪は顔面を濡らした。水滴を払いのけピッケルを振るった氷の下に、春を待つ円く厚い葉のイワウメに、なんともいえない温もりを覚えた。

岩を積み重ねたような新山の中腹に、でっかい社殿が鎮座している。その規模に驚くとともに、この材木を人間の肩で背負いあげたエネルギーを思う時、信仰のもつ力に敬服させられてしまう。新山は享和元年(1801)の噴火で出現した溶岩円頂丘である。これまでの最高峰であった七高山を凌ぐ2237mの標高である。

9月中頃ともなると、夜の冷え込みが増し、静かな山を取り戻す。そして、咲き誇った花に代り、山腹は紅葉の帯で飾られ始める。一雨ごとに気温は下がり、風は強さを増し、慌しく冬の準備を整えていく。そして、季節風が吹き出しとともに本格的な降雪を見、長い冬将軍の支配下に入り、鳥海山は姿を隠してしまう。風は来る日も来る日も猛り狂い、湿雪を吹きつけ、山稜を研ぎながら氷雪の世界を造り続ける。

再び姿を現すときは、神の住み家に相応しい純白の衣をまとい、雲の切れ目から差し込む陽光に輝きだす3月である。雪と風に喘ぎ苦しんだ登山者達は、今度は雪を友とするためスキーで登りだす。そして、吹きつける風からようやく春近しを感じ取るのである。

多くの人々が抱く東北の山のイメージは、朝日、飯豊連峰で代表される重厚な山並と自然の魅力であろう。この点に関する限り、残念ながら鳥海山を凌ぐ山は多い。しかし、日本最古の火山活動の記録ももち、全山信仰の山として、人間とのかかわりあいでは他山の追従を許さない。鳥海山は日本民族の精神文化のふるさとともいえる山岳信仰の息吹を残し、東北の山がもつ落ち着いた雰囲気と温もりのある山肌を備えている。そして、何よりも「おらが山鳥海」に注がれる地元民の素朴な愛情が、ことのほか強い山である。

(1982年、2010年加筆)